

2023年2月28日

2022年度 聖路加国際大学大学院看護学研究科

課題研究

精神障害のある親と同居している子どもへの
訪問看護師の関わり

**Involvement of Home-Visiting Nurses with Japanese Children
Living with Mentally Disabled Parents**

20MN302

岩崎寛人

要 旨

目的

精神障害のある親と同居している子どもへの訪問看護師の関わりを、訪問看護師の視点から記述する。

方法

精神障害のある親と同居している子どもと関わったことがあり、訪問看護師経験が3年以上、精神科訪問看護の経験が1年以上ある訪問看護師2名を対象に、個別に半構造化インタビュー調査を実施した。得られた語りを逐語録におこし、それを繰り返し読み、訪問看護師の関わりに着目した語りの意味を取り違えないようにコードとした。同様のコードを集め、集められたコードにカテゴリー名をつけた。カテゴリー間の関係や内容を検討し、関連付けを行い、その中心となるカテゴリーを選定し、カテゴリー間の関係を整理した。

結果

インタビューに協力してくれた訪問看護師2名は、訪問看護と精神科訪問看護の経験が10年以上あり、精神障害のある親と同居している子どもと8年以上の関わりがあった。また、所属している訪問看護ステーションはどちらも24時間体制を整備している事業所だった。訪問看護師より、子どもと関係性を築くための関わり、親子と関わる上での困難や親亡き後のサポートなどが語られた。得られた語りの逐語録から、精神障害のある親と同居している子どもへの訪問看護師の関わりを示す6つのカテゴリー〔親も含めて子どもを考える〕〔子どもの暮らしぶりを考える〕〔子どもと打ち解けるための関わり〕〔子どもが親を誤解しないように親の思いや言動の意味を伝える〕〔フォーマルサービスの枠をこえた訪問看護師の関わり〕〔子どもの緊急時に対応する〕とそれらを構成する24サブカテゴリーを抽出した。

結論

訪問看護師の主な関わりには、精神障害を持つ親の言動の理解を補う関わり、親からの虐待や精神疾患の発症を早期発見する関わり、フォーマルサービスの枠をこえた関わりがある。また、深夜の時間帯にも関わらず、子どもと個人的につながった携帯電話で対応するといったフォーマルサービスの枠をこえた関わりを確認した。これは、子どもにとって相談しやすく、SOSを早急にキャッチする点から有効な関わりであるが、訪問看護ステーションの運営、訪問看護師が単独で持続的に行っていくことを考慮すると検討の余地がある。